

これからの防災DXで意識したい5つのこと

近年、災害が頻発化・巨大化・複雑化しつつあり、1つの災害対応が終わらないうちに次の災害が襲うような状況さえ常態化しつつある。読者である皆さまも、平時の予防、災害対応、復旧・復興を同時並行で担い、意思決定の重みとスピードを日々問われているのではないだろうか。

こうした現実を前に、防災庁の設置に向けた議論が進んでいる。防災は、「庁」という枠組みを作れば解決するという話ではない。むしろ、防災を社会の仕組みそのものに埋め込み、全分野を貫く共通機能として鍛え直すことこそが本質である。それを実現する、新しい「庁」の形を期待したい。

防災の分野で期待が寄せられているのは「デジタル技術」、そしてそれを活用した「防災DX（デジタルトランスフォーメーション）」である。人口減少・少子高齢化が進む時代において、AIやロボット等を含む「人の代わりに働く技術」は不可欠である。ただし、重要なのは「D」ではなく「X」である。従来の制度や運用のまま、紙の書類を電子化し、個別にシステムを導入しても、業務の仕組みは変わらない。場合によっては現場の手間だけが増え、いざというときに役に立たない。業務の何を変えるのか。DXとは、デジタル技術によって業務の仕組みそのものを変革することにほかならない。

ここで、これからの防災DXで意識したい要点を5つ、簡潔に整理しておきたい。

第一に、「デジタルからアナログへ」の変革である。アナログからのデジタル化をDXと呼んでいる時代は、もう終わらせなければならない。アナログや人で業務を行う中にデジタルを投入する

のではなく、デジタルで業務を回すことを前提とし、デジタルでできないことにアナログや人を投入するという考え方へ転換する必要がある。平時の業務を可能な限り自動化する。その自動システムによって、災害時には「どこで業務が滞っているか」を検知し、そこに人的手段を重点的に投入する。「人海戦術から少数精鋭へ」。これは、これからの時代に不可欠な考え方である。

第二に、「場所から人へ」の変革である。建設とは、道路や施設といった「場所」をつくる行為である。当然、そのための防災も「場所」に依拠する取組となる。その「場所」の上に「人」の生活があることを重視したい。通学・通勤、通院、買い物、物流といった生活動線があり、災害時には、その回復を軸に、被災者や利用者が何に困り、どこがボトルネックになっているかを捉え直す。復旧の優先順位を「重要路線」や「被害規模」だけで判断するのではなく、地域の暮らしを「早く立て直す」という成果から逆算して組み立てる発想を、建設の実務に実装していきたい。

第三に、「産官学民連携から共創へ」の変革である。災害対応を行政だけで担うには限界がある。だからこそ、産官学民が災害時にだけ連携するのではなく、平時から同じデータと役割分担の下で社会を回せるよう、共同設計・共同運用しておくことが肝要である。皆でつくり、「餅は餅屋」の考え方により得意な組織が担えるよう、責任・権限・情報の管理方法を整理しておく。そして、訓練と改善で磨き上げる。初動の精度は、平時の共創の密度で決まる。

第四に、「寄せ集めからつながる仕組みへ」の

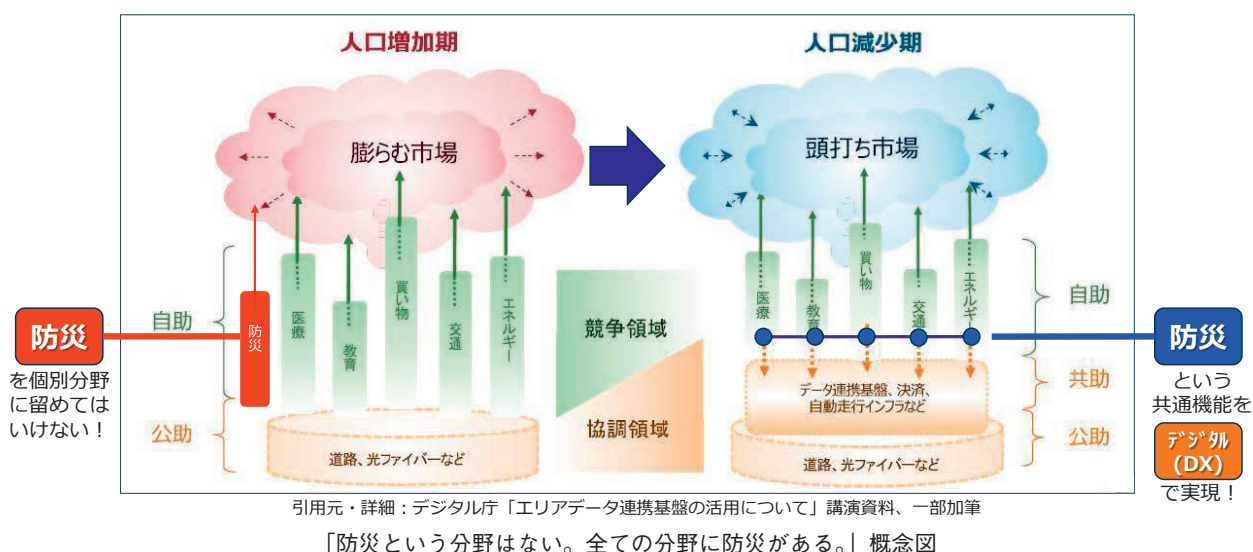


変革である。同じ社会の中で、業務や取組が分断されていては、フェーズや主体が変わるたびに情報が途切れ、同じ確認や手戻りが繰り返される。平時の台帳・点検・記録・運用管理が同じ識別子で引き継がれ、災害時も、調査→応急復旧→本復旧→維持管理へと連続する「途切れない」状態を、データと運用で実現したい。あらかじめ災害時を想定し、災害時の対応を可能にしておくことを平時の価値とする「フェーズフリー」という概念も広がりつつある。単発の仕組みの寄せ集めではなく、平時の業務が自然と回り、災害時にそのまま拡張できる「つながる仕組み」づくりこそ「建設」と捉えたい。

第五に、「世界最先端技術の導入から創出へ」の変革である。最先端技術を導入するだけでは世界に勝てない。災害大国である日本には、数多くの災害で磨かれた技術とノウハウがある。これを

その場限りの成功体験で終わらせず、共通化し、標準化し、他地域でも再現できる形にしていく。さらに、それを国際的な枠組みや市場へ接続し、「災害に強く、レジリエントな日本発の仕組みである」という認識を広げたい。最先端を導入する側から、最先端を創出する側へ。建設の現場から、その転換を起こしていきたい。

改めて、防災は防災専門の人・部署・組織だけが担うものではなく、全ての分野が自らの営みを守り、価値を高めるために担うべき共通機能であると主張したい。「防災という分野はない。全ての分野に防災がある。」これを言葉や概念ではなく、運用として、標準として、そして日本の強みとして実装していきたい。建設はそれを実現する重要な役割を担っている。読者である皆さまと共に、建設の立場から「変革する防災」を前へ進めていきたい。



【著者紹介】臼田 裕一郎（うすだ ゆういちろう）

昭和48年長野県生まれ。慶應義塾大学環境情報学部卒、同大学院政策・メディア研究科修了。博士（政策・メディア）。衛星システムやリスク可視化技術開発を経て、平成18年防災科学技術研究所入所。現職に加え、社会防災研究領域長・防災情報研究部門長を兼任。筑波大学教授（協働大学院）、AI防災協議会・防災DX官民共創協議会理事長として、人材育成・社会実装に努める。